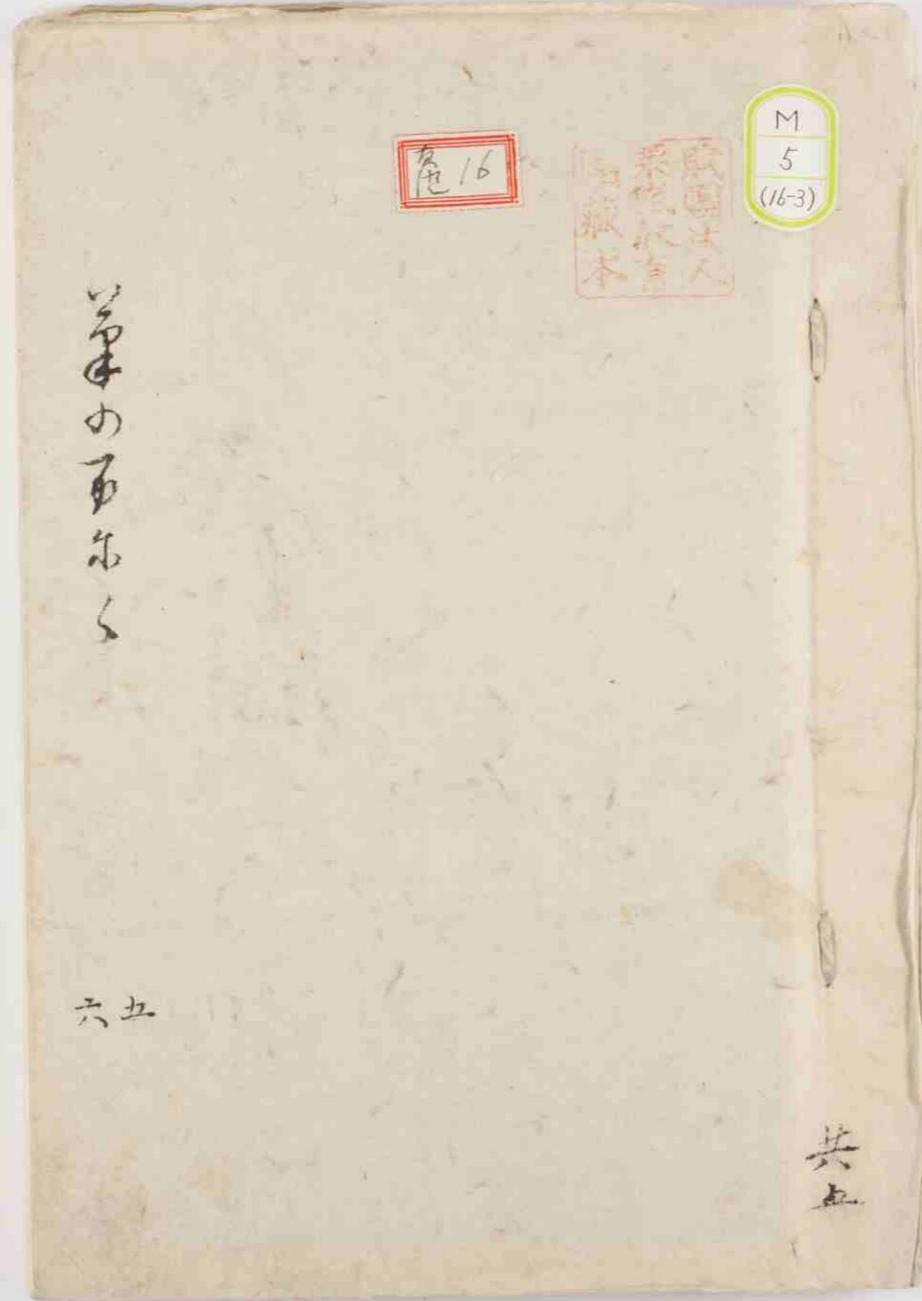


以下 汚れあり



筆此まふく五

はぐろい版
 佐の海
 りまの社
 あはきはく
 とみの年
 中屋小舟
 くる木
 志平まふ
 海らわ子
 あきく山
 白あまけ

咩夜須

一丁オ	一丁オ	一丁ウ	二丁オ	二丁ウ	二丁ウ	三丁オ	五丁ウ	六丁ウ	七丁オ
てむく返け	あつきはち	あつきはち	銭幣は物語	徳治の急り石	わくろきは	うばや火く	こをり月	アアんあかり	石をなむ
七丁オ	七丁ウ	七丁ウ	七丁ウ	八丁オ	九丁オ	十丁ウ	十一丁ウ	十二丁オ	十三丁ウ

あてのまふく五

目録

由きれ子流
すわ川
よきい事

十七才
十八才
十八才

あゝかほのやち
れこの月
ゆさひ川

十七才
十九才
二十才

筆札万糸、五卷

菅江真澄 誌

○はらうば

松嶋のつらね島の内は、嶋といふ名あり、ふねの藤塚式部
八其島、鐘嶋、並に裸嶋、又旗嶋、又裸嶋、名を七
人、よきい事、はらうば、此島を名をこし、本七草、七
うちか、ふね、中、裸嶋の名、ふね、津軽、麻虫の浦、裸嶋、
あり、よきい事、白鳥、名、處、あ、む、名、処、前、大島、裸島、
ま、肥後、國、も、裸嶋、あり、古、名、む、の、ふ、内、を、はらうば、
た、れ、よきい事、よ、衣、な、む、む、は、裸嶋、と、世、多、く、名、の、名、

○はらうば

津軽と津刈、近き世、東、目、流、を、て、津、軽、積、狩、は、名、を、り、

筆の一万糸、五

ま、神武天皇紀より鳥見山中。祭の場を言まて皇神天神とあり。餘り
事ありし。えり。ま。分。た。た。の。ま。ふ。の。鳥見の。主見。破見。戸見。跡を
いふ。ま。ふ。の。ま。ふ。の。ま。ふ。の。ま。ふ。の。地。の。榮。り。て。事。を。祝。り。て。富。山
ま。ふ。書。を。た。ん。く。此。ま。島。の。富。山。ま。ふ。の。事。を。祝。り。て。富。山
富。山。存。在。し。り。近。き。ま。ふ。の。山。を。祝。り。て。富。山。

○まふの島

まふ。ま。ふ。の。石。巻。の。湊。の。和。山。と。登。井。家。の。古。城。跡。を。示。班。部。の。ま。ふ。同。島。の
江。刺。郡。黒。石。村。の。正。法。寺。に。傍。り。て。あり。ま。ふ。此。井。松。前。の。東。蝦。夷。地。鶴。野。部。
小。此。井。多。し。ま。ふ。の。一。筆。の。管。を。作。り。渡。り。班。部。同。じ。倭。漢。三。才。圖。會。の。
曹。後。國。土。産。の。件。に。虎。彪。作。り。と。書。し。て。用。い。て。ま。ふ。の。島。存。在。し。り。

○まふの島

ま。ふ。の。南。部。糠。部。郡。此。郡。と。糠。部。郡。左。井。酒。の。西。十。瀧。村。の。源。若。衛。門。家。の。床。

ま。ふ。の。韓。桑。の。り。大。多。く。は。之。寄。本。を。下。澳。の。夜。牟。宜。斯。の。島。あり。が。桑
の。木。林。あり。し。ま。ふ。の。島。を。り。て。流。来。り。け。し。ま。ふ。の。木。を。り。ま。ふ。の。島。
潭。海。二。巻。の。遠。江。の。佐。賀。良。等。の。海。を。ふ。時。々。異。材。奇。木。漂。着。し。り。事。あり。檀。良
の。名。主。某。が。座。鋪。と。魚。檀。床。柱。と。漂。着。し。り。と。書。し。り。と。同。じ。島。の。

○まふの島

ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。
り。此。ま。ふ。の。島。の。り。照。り。て。内。ま。ふ。の。島。の。り。知。り。て。粟。粒。の。り。ま。ふ。の。島。
南。部。の。脇。野。澤。の。浦。近。に。大。波。の。磯。の。白。舎。理。具。と。ま。ふ。の。島。の。り。雪。の。り。ま。ふ。の。島。
の。浦。山。ま。ふ。の。舎。利。あり。舎。利。母。石。の。り。津。軒。の。外。濱。の。鏡。月。の。地。藏。前。の。舎。利。石
と。は。能。人。知。り。し。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。
ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。
り。其。舎。利。の。り。津。軒。の。母。石。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。ま。ふ。の。島。の。り。

筆のり

その釋迦佛の形を安置するもやうにそんをす

ありがき

赤銅アカドの名八蜀山居士事 黄鐵ワウテツ名物 丹陽ニョウ名藥 自然銅
ありそがのるる金山カ士藥譜 金カ士事 散佐里本藥 此真銅と、天武天皇、御代二年、因幡国防西國より銅鑛
と貢とほく、元明天皇御代、武藏國より真銅と度雲五年より、
也との名なり、和銅元年より、本草啓蒙、金石部、今世銅の出處、
州多田奥州南部仙臺羽州秋田最上越前胆前豫州日州備中濃河其
外諸州を、出大抵四十八箇國より、越前と上野と、集鮮銅とい
造作者多し、時珍の説、白銅、雲南、青銅、出南者、此を自然の
舶来と、云々、下、鑛石と、云々、あり、ふめ、と、鉛、い、
銅鑛石あり、秘の、は、く、金星有りて、茶色、光りの、

むく、青光あり、と、上品より、黄色、光り、
黄は、く、又、く、は、く、下品より、色の、あ、り、
も、く、上品の銅鑛と、鑄化して、銅、と、銀、多、く、出、下品銅鑛
より、た、銀、銅の長、尺半許、幅、五寸、ふ、く、平銅、
天工開物、謂、方長板銅、より、鉛、の、名、石、液、の、名、坑、
は、方言、の、事、此真鑛と、碎、て、鐵、追、て、其、
直福、石、を、焼、く、石、を、か、り、て、山、に、入、り、
よ、か、り、石、を、焼、く、の、金、を、鑄、て、輪、屋、に、上、合、事、
西下、り、小、作、り、西下、の、事、西下、輪、屋、に、説、
入、り、百、千、燃、之、地、も、白、ひ、り、事、少、鉛、坑、を、
小、あ、り、の、金、短、く、下、真、鑛、と、然、其、金、下、
炭、の、籠、を、き、衣、を、稻、稟、を、覆、い、着、衣、

筆の万、五

六

塵塚小捨るもあつて穢れもよの産言ふはわぶき華式小用捨り此
 まの建つまを衣の中覆ふ山と言例と金良削り其燒釜の
 口より風を吹かす風といふは此の風ありて名を公風といふ
 又物輪嵐直嵐西嵐鳥尾嵐響嵐といふ言ふ釜の名を公の敷
 多し担釜大旭下旭部月見釜彦釜新釜重釜五月釜
 東釜直有釜二月釜横釜新横釜二釜三月釜新榮活釜古務
 釜末廣釜新拾上秋中秋正月釜廿一釜新重釜重釜此釜
 小鉋石を四百八十泉ありて文を焼く下をくふる下をくふる

あきやう

出羽國秋田郡大河仁庄ある森吉嶽に藥師佛の御堂と造營すと云ふ
 四照元正天皇の御世靈龜元年四月一日して神事ありて世は計し
 ます上天と稱ひ麓寺あり森吉山龍王寺あり六代は世経天皇

平城天皇の御宇思荷嶋小あやの鬼をとりて人を多きけり
 此事と云ふも大銅二兩の春のた坂上大倉種村
 磨と大將軍してこもり鬼をち平てその既す境い小太神障
 給ふ出羽陸奥の國堺も高清水と高十四丈落れ滝ありあり
 本ぬく枝をいれむすくしそく小岩倉嶽と大なる窟
 あり其窟の内小大桑打りてり承のけ二丈面十六左右の手も
 十六ありて此大桑打りてり將軍此桑打りてりむすかじ
 といふも大桑打りてり神のけをまは金まはぬ
 事のかつてぬき森吉神あり給ふ本より風を白鷹の
 霞をわきま下將軍のむすまはぬまはぬ白駒の
 来はれ將軍のむすまはぬ此神馬ありて此山岩の
 といふ世経給ふもつら風吹をりて元もく大桑打り

谷のすまやうり、蟾ヒキカレの嶽ヒキカレと山のいり、蟾ヒキカレの似れ、てふ、あひま、春の
 社の鹿生洲の龜山ヒヨクの獅猴、稻荷社の狐、白龜社の白龜ヒヨクの類、
 此の山、つらぬ、谷蝦蟆ヒキカレれ、わが、追ひ、鶴ヒキカレの嶽、
 春三月の末、四月の始め、比内の方、此山、えれ、鶴の舞、す、ゆ、雪の消
 残き、雪と枯せの色、そ、れ、の、形、不、二、の、つ、茶、似、り、方、部、の、嶽
 万武ヒキカレと、は、ほ、り、多、雪、の、流、か、き、と、恐、ま、の、そ、で、麻、布、の、似、り、
 坑山の礮石ヒキカレと、方部伊斯ヒキカレと、い、ま、の、世、わ、り、商人の諺言ヒキカレ、其、良、事、で、
 真歩ヒキカレと、い、ま、の、幽、齋、道、記、ふ、ま、廿、九、日、石、見、れ、大、く、と、云、ふ、ま、り、
 明、る、あ、い、友、仁、間、り、津、ま、り、石、見、の、流、あ、き、と、古、事、の、小、女、の、心、
 云、て、れ、り、や、て、銀、山、こ、え、て、見、に、ま、ま、ま、と、云、城、在、上、小、女、の、心、
 見、て、城、の、名、を、こ、ま、り、多、れ、や、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 中、へ、り、麻、夫、了、事、も、ま、り、ま、り、ま、り、石、見、の、流、銀、山、を、此、出、羽、の

秋田の阿仁の銀山をま、麻夫の嶽の麓に在、る、前嶽と、名、呂、美、
 其、ま、母、路、味、山、の、山、岩、と、小、石、く、む、れ、木、な、れ、と、ま、り、の、心、
 あ、い、え、れ、か、こ、ま、と、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 その木、ま、り、大、く、ま、り、ま、り、ま、り、此、山、小、生、ま、り、大、事、の、小、女、の、心、
 横、に、ま、り、山、詣、ま、り、人、一、枝、の、山、と、小、折、来、て、給、ふ、清、火、小、女、の、心、
 二、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 永、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 中、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 名、所、と、備、後、國、鞠、の、浦、の、山、と、小、折、来、て、給、ふ、清、火、小、女、の、心、
 此、流、の、色、と、れ、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 本、の、事、に、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 多、る、木、の、葉、を、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

筆の万の五

あんなく向嶽と大山祇神にて居せり本地は除地如美薬師佛觀世音菩薩北三柱のりまて山はる白松とてて嶽と永松と五葉枝繁組た山岩嶺深谷をぬきて復たの松とふまきいで松わりの御嶽小山鬼ありて人恐り後嵩の岩堂といひ大なる岩あり積の御神まきりま此岩の上澄水ありかづゆふ半天河水といひの水紙心といま堂に入て眼ありふあり山ありの藥草も中に菊葉黃連あり此の別當ありの今本莊村と和光院上祖と板垣河内守某の枝神の三俣稻荷社同石神と三昧權現石といひ狭岐社といひものも八群杉山の社といひ守義の高の神の遙拜所此村杉山母呂美山の麓といひ佐又村胡鷲村といひ近一群杉山本林吉山龍寺といひ天台の寺跡といひ寺古林吉村の今地藏堂といひ地ありてといひかはり遷り水といひといひせりといひまての龍寺の寺跡といひ

村の地藏平とて正が久ま群杉山のりまに本居杉といひ大なる齋杉といひ舊りて今て麓なる人此神杉を伐りて杭柱といひなりま價といひ五六人か此杉を伐り倒ると木のそりやと血なかりちいものほに鍬を投ぐるとやと死にやと瘧疾に罹りたりそれ親族をさるえのやまといひなり死して今と後を曾孫年より事といひをいひ東堂群杉といひ兩村のありといひハといひ住りしむ人の齋をりて生主杉といひといひ式杉祭といふ末と山神といひせもの手染の杉の切口といひのて四尺ありて人枝葉茂りたりといひ人から事といひ今と私賤といひれと株折れといひをいひ登夫佐多底といひ教といひ此事といひ万葉集三巻神代卷鳥總志足柄山本船木伐り同七巻神代卷登夫佐多底船木伎流等伊布宮村舟村を切り其末と株の屋といひ

筆の五の五

小野氏の七れりて又れ甘露七類ある事々

○錢幣の七れり

古孔方多く持てる旅人れがまき古錢幣多小集り中六隆平永寶、
常平通寶富壽神寶より孔方を近きころとゆりてりてりての
貨りやまらふ小知をも令せふかみのまきえくとして元元元元
いつて延暦十五年六隆平永寶より錢弘仁八年六富壽神寶より
錢幣を鑄てせむい事續紀に又へりま、常平通寶は朝鮮國の
孔方之大錢あり大錢六卦廿八宿をの文ありて元と小圓ありて用錢、
黃銅してて中申も七大中ありて背に戸二総五をの文字あり八錢
の外にまき假鍮の小錢と通用するなりなほ雄鹿の泉風錢より
書に常平通寶の圖きまらりては、照本の浦空舟流きまらりて常平
通寶二百泉をりめりて浦人こがこまらりてとて又り朝鮮錢の

ふらぶの事浦人小話ればと朝鮮の船をむりて旅人申す大は悦びぬ

○徳治の事り石

土埒の淺の稻見の岡の近き砂山の内の御塚とて其宗廟の人々の願ひに
小七日籠めり舎ありて塚原山見性寺といふ寺ありて寺より下日蓮上人の
石像あり是れ船人のつれまじり石像とて石の形をそとりのせむに
せむとて土をまきむりてありて津輕のまき音ひのせむ
一夜とて小舟も枕上小夜をくく小経をみけまらりてとて
此石像と見をるぬの八千度妙法蓮華經を唱て夜をくまきやと
くみかひらひ石像のまらりてとて小夜を明くて經を題目を唱
えん人知りて堂を建んまらりて此石像とて小夜を唱て四面をくまき
首題とて徳治二和曆とてありて日持上人のく小居り
石像ありて日持上人とて老僧の人なりて佛觀經記ありて日持上人

くろぎいりいり江崎子温故名跡誌卷神田のまじ淵の近き小其虫や
多りけむ蟬橋より多あり小々を石橋をい東壁をい下分りきハ
ころみかんい鳴く蟋蟀よりころきりてい各ふあつて

○ふやのひんじ

出羽山本郡八木林湯澤濱村藻浦三石を少て産婦おのい家
みゆい往女火焚おのいを夜にすか起居く火をぬく事之
西遊記後編二巻産婦のなりに徳の嶋小琉球人多く婦人多産
す跡少其産屋のやよりい晝夜火を焚事二七日間晝夜
絶を焚くふり家富りのい何百束焚ぬるとして薪を多くい
せをさるとい山本郡藻浦鉢杜の浦のやハ小中似る事之

○こむらば

同國雄勝郡小赤袴村ありこと小大袴村あり秋田郡出川あり

小袴村あり此小袴を中をさ記の事と云ふ此あり中特置裡と小袴
こいし世小越中あり世をい無相小袴をい下ぬりい
村名かん此あり代載も諺小はらま破り陰囊出河と云ふ

○ママむもめ水

佐竹の御家に名馬ありく渡邊義兵衛某より入来りく文化元年
云々書きけり死のころ久保田を甲刻二かせいさちあていさ
雪の消え残りまぬり路をハ市り由往きをい能代已刻と云
かて其日さふ及び父保田小飯末ぬ能代六往復三十六里の道
をい此馬の名を鯉鱗に付させ給ひた六の奥の意此馬をも角館
の鉄工五郎重門がとせり馬をい此内り産り馬と云ふ

○いけらむ

みちの南部沼之内郷にい近ぶ石花村あり其村小觀世音寺あり

此觀音の坂は上へ阪の下中ふ黒石あり上る石は五尺の三斗下を
石は高き石より大なる石より似る其石小粟粒の大少くも紅い
花咲ぬれば五月のはじめはより咲初て秋の末まであり事子母
をれば枯りしよりおまきさきしたてをて石花觀音といふ村
名で石花といふめづきあり

あまちこ

冬、南部毛布郡花輪郷六日町といふ家の本家名衛門家少背
り八月はて醸醬といふの醗醴酒して日を経る酒事を醗酒を令こ
れ醗酒といふ甜乳醗酒といふが旅の病を治す病を治す
ゆへ余は飲りしおしよをりおまき家におまき火を焚きおまき
久葉飲め強道ていふ日を経る酒を令これ醗酒といふ
此濃酒を醗酒といふ今とあまちこ屋を令これ醗酒といふ

ひまのてら

冬、南部毛馬内郷小鞆明神といふ神を令これ鞆馬神の
多かひにおまきといふ此處を令これ狭名御大海の上祖と大皇神とい
其神の負ひ給ひしやのれ鞆を令これおまき由貴社とい
まき鞆明神といふまき八日鍋龍頭御弓を令これおまき
當社の別當八天台宗といふ錦木山觀音寺大化のやむげに寺といふ
淳和天皇の沙世天皇元年の冬ありて再建しつゝまき鞆の隅に未社
まきを令これ東にまき名命西に稻荷大明神南に荒神素戔高皇北に麻利
支天社在りまきを令これ今と稻荷御神といふまき大回三年
大坊一位といふの家を令これまきを令これ六尺條といふまき田村將
軍書といふ諸佛集會陀羅尼經一卷ありまき大板金剛片屋といふ
まきを令これ本會會代き用ひまきを令これまきを令これ其後

今ハ不勸院祐歡とくちなり、古代ハ錦木山觀音寺の縁記あり、
祐歡法印、大方一位が栖家の柱包、
の書あり、
万代途とありき、

○河内海舟

かた、毛馬内の蘆名澤と云ふ處に土面觀世音菩薩あり、清和天皇の
御代貞觀三年辛巳八月、圓仁大師金像の土面菩薩と法華山堂側
の書あり、三日の行ひあり、
金光勝寺住僧者鏡法印草堂建立あり、百十三代聖元院の代、
貞享元年當國太守重信公成世葦名澤櫻庭氏建立あり、
南部郷人宇多源氏成流狹崎四郎高綱後胤下り、佐木と今

書ハ假字、古ハ狹崎之佐々木ハ鈴木を、
西行法師の教、
今云ハ毛馬内と北のほり、
あは下津輕の浦母、
語ハ文字、
夢見ハ天蓋、

足澤もかたきりしやあひむかひ

さわ川

佐々川と犀河と書く信濃出羽陸奥遠江其外の國々處々も
此川の名聞えり犀の出口をいふ俗説をいへばさわ川といふはさわ川
佐々川と古き河の名をいふ古事記神武のみまは伊須氣余理
比賣命之家在狹井河上といふえり以曾農御妻といふ書小記に
いふ古事記神武ノ條伊須氣余理比賣云々此細注其河謂犀
河由者於其河邊山由理草多在故取行其山由理草云々佐
々河也山由理之本名云佐々也云々といふさわ川と早百合川
其命の神号余理比賣と由理姫といふあり

よこふといふ事

横座と其二間の内の上よりある処より安否人を居むる文昌語

よこふ偽り商人来る処ふ文昌横座より居る關白も事の時
きとて元十訓抄上之三十八書寫性空上人生身の普賢を見たり
よこふ寤寐祈請餘餘けり或夜轉經之疲く寝てきり眼も瞶息
小寄りありしはよこふなる生身普賢をいふ事
神崎の遊女の長者を見よこふ由りてなすめ奇異の事といふ
能くよこふといふ長者の家よりつきせられ只今京より
上目の輩より遊宴乱舞の程之長者よこふ居る鼓を打
乱拍子に次第をうる其詞云々周防むらたの中なること
井ふ風ふふよこふといふはよこふといふ上人閑居して信仰恭敬
よこふもつらむ守りお給下此時忽ち普賢并の形と現下
六牙の白象よりく眉間の光を放て道俗貴賤男女を照す即
微妙の音聲を出して實相無漏の大海を塵さ欲の風を掃

筆の万の五

其蝦夷舎の跡を掘りて紐鏡陶皿を出事ありて此の諸君
 去年の秋夫蛇峯小枝よりありて此山の嘉樂の寺なる事神の
 鳥居樹として二本並びけし中より一は向の木を人一人
 同ハ多知良といふことなり此木をいふやき多知良といふ
 此木を樺といふ木少て松前嶋とほり陸奥國にて迦波以信濃
 路本曾路といふゆゑゆゑ此木の皮とて紙のてくに包き厚紙短
 尺に制し之蝦夷等此木と樺といひ皮と多都といひ皮と刺
 て笠を作りて多都等より多都と蝦夷詞より笠は倭言葉
 庚語体言交ても事多し多知多都通じく虎の言の餘は
 あらめわら事なむとて此あたりは多知多都蝦夷の住居つるゆゑは
 名れり此水元と太平岳の東麓ありて母溪と旭の谷ありて
 朝日勝川の親川といふ多知り流る南の弟子飯の淵水を北に

赤倉ヶ嶽の溪水まゝ南多知薬研谷の溪の水流出てむつ
 谷會大内灣と成りて流ぬゆがなめて名は旭勝川といふ
 省界として朝日川といふゆゑ之中日を多知といふ此仁別村に
 本を多知大嶋多治兵衛といふ人の家小中つきありて
 空牙えわたり小雪零りていづれ寒け水は 此はと樺のこま
 梅の花も夕霧は此果の山 家の入るも小すびつは
 居るに語りしつとめて又ぬるも公に見まゝやいとやうぬ
 鶏鳴きむまゝいづれか人を能て出でたむきもつれいふ
 を出て身もあやまらぬゆゑいふゆゑにふりては
 蒲の五きまき小雪當りみちをたひもち掛樋の水もりなむ
 田面小川もふ水わたりて魚も夜はれ寒たりしははい冬の
 こちせりなむい連出ぬきみ流る旭川と母川より金花山

筆の字あり五

廿一

山のふもとに八幡宮と齋きまつる其麓の山田の岸に雪が流るる
 戸澤より山川の良のまゝなまぬり出てるれ北無川小落の副波
 仁別河の北にむらり出て坤まきやなれり禪平といふ處を
 西瀬の落會にて村と三川の中れりは鬼き垣尾上高秋の
 いちの家居に建てる山奥の村なるに里の穂
 豊にて産業しなかるも栖家をて男も女も形者ハ藤の
 白衣の衣を着て出立あらむ田耕衣よりお那藤の白禪着て木こり
 柴刈炭焼山田佃もふるに級衣も破れぬの裾わらふ人多
 かり山賤の素藤衣をて世のふしの風俗を思ふなり北仁別河の
 長橋二箇處より掛て里人つち小往來せり此橋を渡りて向て邑とい
 ふよりぬらむら此山陰に長龍といふをて流き流るる
 山にふせまるとんて心立まらりて家の坂も栗島といふ

榎登りし作り栗生の跡や今とあり由小狼よりたはしりて
 左なるて谷底をほひ雪と踏み氷を渡りて山路下り登り組つ
 むせせ谷底ふるる金童龍といふといひ低くから流るる此流
 まる榎をて作はる作はるい評りていひぬらむら
 乾の方小鬼の倉といふいし山奥に追て崖あり
 ぼくそれおだりに松倉よりやう方木に千本ばかりも枝れ群れ
 生ぬ北絶嶺に新城庄を湯香派の不動瀧の水源といひ
 そこふ深きいなる水に斗りて大池といふあり今も
 石せにあせての深きいなる池に北池水も山は思ふる
 千尋と高き岩嶺なる巽ふむきとておぼむらむら山風
 の吹ふじかけあすに魚も長瀬といふ茶子といふ
 あり其の恩荷の嶋山の縁瀧見るとていふをていふ

祖神ヲシム道祖神ミチノヲシムと音讀ナリの杜ノのこゝをふ遷リて、主堂トシテを移シて、仁
 大師ニの作レて中品ノのありき、や置キて安置スまゝにけり、いふに、（イハレ）
 ぬちをまゝと、今ニ十五堂トシテと庵トシテ唱テて、布シ帝ノ山ノ齋ノ勝ノ庵トシテと呼ビて、
 今ニ添テ川ノ村ノ湯ノ澤ノ山ノ來ノ福ノ寺トシテと本ノ寺トシテして、漕ノ洞ノをぬクる、（イハレ）
 天台宗ノのふ下ノふ、仁ノ別ノ川ノを橋トシテと渡リ、其ノ鷹ノを、（イハレ）
 天ノ宗ノのふ下ノふ、仁ノ別ノ川ノを橋トシテと渡リ、其ノ鷹ノを、（イハレ）
 北ノ宿ノと近ノき文化ノのほ、（イハレ）
 新ノ左ノ衛ノ門ノの家トシテ、（イハレ）
 鎗ノ刀ノ狭ノ隘ノの金ノ具ノの、（イハレ）
 近ノき世ノのふ、（イハレ）

な、（イハレ）由リ利ノ郡ノ荒ノ屋ノの浦ノに住ミつゝ、（イハレ）
 其ノ處ノを、（イハレ）
 け、（イハレ）
 の山ノ蔭ノに、（イハレ）
 の高ノ野ノま、（イハレ）
 應ニ永ニた、（イハレ）
 宿ノの、（イハレ）
 中ノて、（イハレ）
 古ノ録ノの、（イハレ）
 此ノ家ノ中ノ、（イハレ）
 八ノ幡ノ橋トシテ、（イハレ）

筆の万有、五

廿五

瀧は是も一万余の小をせりて流る、此を仁別川と十餘年六の
 淵瀬と敷と云ふ、柴橋獨木橋、棧道、垣伊ひ渡り、あなむしと
 中々休む、香草株、山賤の来わさく、このひ給ふ、六の六、六の
 云、羽陀、大谷の奥をむ、此年、八つを雪ぬく、六月、あなむし、ひよき、ふ
 ぬり、鬼ヶ原のあり、山業、も、の、も、標、定、り、深、を、小、原、を、
 り、ひ、及、り、せ、り、と、強、く、穴、給、む、を、ふ、き、ふ、出、り、ち、雪、の、氷、り、さ、
 とき、谷、を、く、入、り、て、す、と、れ、は、ま、が、り、歩、ぬ、銚、子、の、瀧、の、水、源、博、流、は、
 色、水、と、い、ふ、あ、の、葉、き、ま、ま、小、鹿、落、と、作、水、雷、で、さ、ま、り、え、る、て、
 某、橋、と、て、い、ふ、あ、り、ま、ち、里、に、流、れ、出、る、料、之、と、い、ひ、れ、の、さ、り、ま、ぬ、む、
 と、み、ま、い、松、と、い、い、も、此、事、を、い、下、其、あ、り、近、く、一、枚、比、良、と、
 高、を、り、も、ま、ぬ、岩、嶺、の、雪、に、營、の、窟、を、深、き、も、来、く、花、や、迷、
 消、ぬ、ぬ、雪、の、く、く、ふ、う、く、い、は、比、給、ふ、此、飯、さ、か、を、山、以、て、作、り、

来り、杉木坂、を、を、り、西、と、さ、り、仁、別、川、を、渡、り、ひ、く、木、瀧、の、淵、
 あ、む、り、こ、こ、小、松、と、葉、積、り、の、と、港、に、材、こ、こ、は、い、ち、ち、流、
 ぬ、れ、名、を、と、り、山、陰、小、法、派、と、い、ふ、処、あり、ま、ぶ、ま、と、流、
 水、流、り、ひ、ひ、て、丸、く、名、を、ん、み、ち、は、ふ、も、ま、こ、り、し、ゆ、え、り、ま、
 大、谷、地、と、い、ふ、む、り、大、池、の、あり、跡、い、わ、り、と、い、ふ、鳥、越、也、
 山、あ、り、鳥、越、と、通、り、踏、え、い、い、へ、一、往、復、せ、古、道、の、跡、を、も、
 ち、い、下、山、葵、海、を、見、つ、し、り、八、成、大、坡、山、ま、酒、の、方、に、普、
 山、齋、勝、寺、の、あり、寺、の、ほ、り、小、池、も、え、こ、く、仁、別、川、と、大、谷、底、の、
 小、臨、山、葵、海、の、瀧、と、い、ふ、さ、や、り、の、滝、を、か、く、い、わ、せ、り、
 小、池、と、踏、踏、え、り、谷、陰、に、鷗、鳴、ぬ、著、り、ま、と、い、
 こ、ま、ち、ま、い、谷、ふ、き、う、ぬ、い、ま、ぬ、五、輪、淵、鳩、岩、淵、立、石、淵、
 を、ぬ、さ、ひ、見、つ、さ、や、の、高、岡、ふ、わ、り、して、よ、ち、の、り、西、大、神、宮、山、常、

筆の万有、五

共

多ては下あり六卷

めやま

さねきぬ	二丁オ	まみろのれおし	十五丁オ
らめとせりよ名	八丁ウ	さしけのまろ	十五丁オ
けむけえがし	九丁オ	ちれまろ	十五丁オ
高志のたれ語	十丁ウ	あそい	十五丁ウ
狛崎乃むり	十一丁オ	七倉のもち	十五丁ウ
閑眠子が物語	十二丁ウ	志すふのめろ	十六丁ウ
蚤虫はぐり	十三丁ウ	かきさしれおろ	十七丁ウ
黒鳥の社	十三丁ウ	あそび	十七丁ウ
はし原の志むぶ	十四丁オ	あそび	十八丁ウ
天狗の繪	十四丁ウ	鶴が池原のつぎ	十九丁オ
えちこ名寄セ	十四丁ウ	アそけのたれお	廿丁ウ

多ては下あり六

目録

筆札万巻六卷

菅江の万須美三郎

○されきぬ

かれ童のむし屋張國小存りて名古屋橋町といひぬ古物店小の
 調度ともあつてふふのれ又いふふさぬ金銀平書物といふ
 ぬるやれぬりたる琵琶の管あり事と飯末とふふのり見り此
 さきに衣をいらぬ名品ふらと今ふ回ハそとありけり名をぬ書物もいふ
 八の三やとて平手家好人小回ハかれをえぬ樂の琵琶小手家語小一をけれ
 又いふて飯ありとて平手家好人小回ハかれをえぬ樂の琵琶小手家語小一をけれ
 其商家とえぬがさぬぬの相のええとてけさハいふとて三目日記日あり高
 黄金小喜人小賣といふとて平手家好人小回ハかれをえぬ樂の琵琶小手家語小一をけれ
 あめりき寶人小賣といふとて平手家好人小回ハかれをえぬ樂の琵琶小手家語小一をけれ

あての万巻六

一

せいのふりふいり(船家いふ)蓋し三浦豊後久兼家^{ユカシ}の領國の國司に
 置て取まの郡司を初せぬ國久小鞆大領冬宗中いすの嫡子早世して
 次甲小治郎晴宗としてせし流けし心及優^ヒきし知り詩歌管絃の外
 書畫の工事事^ト類いみじく才多しと云ふをよきとせり世に
 さる日都小登りて國司の館に宮仕へ侍るうち父の大領早まり小継母の
 ほろひやして三男三郎直宗ふるふの流業を襲ふれ小次郎は國司
 の覺え他^ニにえ終が争ふ事終るれ心はほせり在京のち紀伊某が
 娘初瀬と云ふと取り借老のちきり流るに若けり父墳墓をほろ
 多々又一族者も國司の恩顧のなごまのゆりゆえのちかよひたちて
 國司のさけりや中けり衣服太刀を以類いみじくたまりてききき
 こる妻をもも従者西三と具て難波津より船をもいりてさか
 春の涉る長閑なる曉小瀬む須磨名明石のふる是か一刻千金^ト妻一人^ト

酒さくらり吟情をなす一夜をまていもをちて詠め居り船の者も
 よやひも高く圓わりのを海に女を予ぬ其頃伊豫讃岐の間海賊を
 横行て往來の客船をなませり小次郎もかこもて不慮に備せり小
 中より海賊の窺ひて執睡をえりて究竟の者も小次郎が船上器物調
 度の類も子己が船に移せし初瀬驚きてこいひか音あつてこれと云
 船うちこみりあを小次郎目さめて起あつて有女をいひ海に舟あり
 従者の稱をいひあつていひ海に舟あり水も小舟をいりた衣履を
 賊船に逢ふ漕をぬ初瀬をとりはは味ていんもききき海に入らん
 押へく依得せし中を賊主と云き詞をいひけり云汝をなげし
 小つら秋葉わが秋非義か方まも下しれあつれ海に舟あり桶子あれ
 とせしと云ふ妻もむし下賤の女を娶んべと心る事以女配る
 ぬ容はなれ秋息婦かていひ思ふははい垂り心もせり利書はは

あてのり利六

見よといふ初瀬眼前小夫の死を又てふふたりこふなうて辱めをなす
 頗る心苦しむておれ敵とてりて怨を報い又も手向をなす心づく
 ためて涙を流すも賊の其のけがひらまを以て船を岸にけり己が家も
 賊の妻もとりて唯乳母を老母入のこしに其のれを海賊者も
 集り居る嫡子も古世やと風のこらして引とりぬらほして心づく
 徑もち賊ももまけひの外心づく安堵して家事をまもり十月のこして
 人々未だて長州の高船来りあり其備へ是固心づく心づく昔賊主
 其夜大小の海賊も引具て出ぬ初瀬幸ひ老母のぬと信り裏を
 一重垣にこえ四方をたぬももり都外にやぬぬ路に人々をれは
 中をなすおれをとりてまおひひもる事もす月の出りやぬとまふ
 をる小蘆草をひかりて路を度や九三里を未だぬん小舟をひり入
 海に下り海人をも引取りて右より小遠里小鶏のあもはて人々のあ

小舟りおち小夜をぬり明わら頃わたりて破舟出り高船が
 一艘つるにありたりまきりたはけぬれ小舟のうちを待たぬおれ
 仕事もつるぬらにまき事と船をとりてまきまきくせぬら船を
 岡江見ふ艶を女の髪をぬらぬらこらびこあをぬけぬらぬらぬ
 せも天竺の國色も眉も船を俄にひりぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 をぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 さぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 を息ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 をぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 小徳つきぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 尾の長いぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
 其頃下と吉備とつるまを海路のせす後葉集りぬらぬらぬらぬらぬ

本てのりあ

船高船の艦をつつ路の邊の柳客をまきまき抱ひて去る人のあり来りあまて
 籠籠あわひつと折せしむ六雁客旅人の船をわたりしとせしむあまら
 葛尾の長中ゆえに家居をきまらかふはさし侍れ國の下司或祿き
 さしめ人をいひまきさしやせんを比國司代をいひむすまて適に東
 る人多けれ妓女を綾戸二村袖師を名妹の名四方ふかれかてれし
 鄙して初瀬の艶色小なぶりの長衣小衣其客をいひんをさしせし初瀬
 人商人の船小在しそめて毒蛇の口をねん虎狼の害をいひんをさし
 しのとせしむ夜昼と今むりついで浮きいふとや王照君の胡地遊で漢方
 里月前鵬揚芳妃が驪山の春宴をわいて和花枝春帯雨しりけ人の
 かやのやれ誠天然の國色惱り西施浮る盧氏せまら玉をや輝きを
 煙花小則ら妓女小あてさめんい多くの妓女の中を綾戸二村近居あ
 かかの上はもくさし詮き事あらぬ中親夫のわめふわいをさし川舟の

流さむし或ころをばも人あはふおせられさる安小賣り渡されし侍り
 細々し馴れれが又おひや事し侍りて寄り来り人もつむつけたりのを
 侍りばぬかがる波の枕ををかまひしと漢もきししわらばはれかめ小家
 小なぬかやけあ世をも志めしとそれをさしむとささか中誰かたの
 も侍りなむとまはれかて茶多きにすしれ茶小せき多くの妓女
 詞つきて今志はしほの色香も目ふる心もさる紀ころつてありきと
 綾戸が園いりり重ぬきめ夜人志つまりて後綾戸又さす君むすも權を
 守り此上いさる遠死國のゆるさるされかきめとるはれ今も思ひ候し
 わるも其上此里に妓女多り候中かを白拍子といふとある客をいしあは
 るは唯一これ風流酒宴の興と漆も高貴の家小召されて月花の色
 を増めさして操をさしれ候ふも侍り君年々都へ見れ全様をい
 堪能してやからんあれ其たなはとあなまり里のさしむる客を

心ももつる事ふたたび下りていともいともきこむ初瀬を中我
 甲斐守の命をすててふふいふおぼて夫の仇を報せんが事なれ身と満
 さや高貴の家は近づくを願ふとあるれはあて涙とてゆは後居らぬ
 夫のていふ事さういふおぼえもふたふたひ給れぬいふ後居らぬ此
 昔の計りありしと相言り後居らぬとてあはれとていふ事知り
 馴らばせぬ水が天をさるるも停りて花いひをけけ頃も藤原朝臣
 御新の國府へ下り給ひて近江朝家の事歎きふ海賊追捕と忽ち
 此度と海賊とさういふ捕り油路の風波を静めぬ別物と蒙らぬ
 西國南海ふれしと施りぬまは諸國の未使たも國府の聲を依
 まりけし一日國司誕辰の慶賀して白拍子とめさぬ初瀬の敷
 館小室に思司甚きお妙子と賞給ひ敷目ふ給あり夜月いづこ
 南の殿小出給ひ初瀬琵琶とほよまらぬ初瀬床をぬる錦の袋の

紐くくゆらゆら涙とてあやゆ池よりさるる涙をふ抱き四指
 くきさし二曲の彈をに大絃小絃嘈々切りて雨の如語をこき膝の
 鶴夜鹿腸を断ちて泣きとて許さぬ蘇言婿とて細谷川の流れを
 ぞわらぬふ國司を中狩衣の袖とて敷し給ひ汝中小限なれば愁
 あふふ似り流離哀怨の聲死然として涙をけはまも泣かば
 おもは撥を捨てぬまらび絶えぬありと涙をさるる事と
 ゆえまらば此琵琶をも裂帛と名附て夫が常と秘藏たりととせ
 以前海賊襲ひりし時さういふわらう侍れは海賊のいふに君は
 といひて来りけし字さういふ中ふ國司の聲を給ひ晴宗の家
 折と板館も来り見えぬ國司のさういふ所め女堵とてあやを
 ひよまらぬ横難又汝が報復の志感さういふありけし板の
 湯さういふ幸に海賊を擄り取中ふれやたらその賊天網と漏さるる

事のふち、六

五

住居としつもの國の後よまらざるや字ふ初瀬をぬせまらぬゆゑの
 名ふふまも唯西三人の面影とてめくもあつて國司もまき候此琵琶
 と清りしより揮ふ賊の巢穴をさぐりて頼て長小初瀬の身の價を
 五まを北の方け許しむるふを給ひ彼裂帛の琵琶國人皇川庄司
 ありしものなりなるぬらひを召てあつて給ふは年豫州大正嶋の分事しき
 まるとなふ海藏寺の禪院小寄宿りし時寺僧のあつては僧額
 あつてまらまら其未歴てあつて侍り小同ふ川七いふの檀越香火料
 小より寄せりてはなりとせむとて賊を踪跡を影嚮せしむ豫州
 の諸司小追捕の事まきりに促したまふて四國の賊の數澤圍えぬ追
 捕の密使もふ小追捕未小國司初瀬とてふ小簾中たてまき候給ふ
 其者ふあまもいふとて賊を漏らるる猶と川上の住家探りまき候
 影跡を翌春大州の沖りて防州の高船に海賊あつて武たりと折師

追捕使の進ふかり居此動靜を中より捕圍へんと候は捕て居るふ
 系又ふめめ初瀬小候にむふおれを賊をたれ茶を張まおれそ
 盤詰まらふ七年已前京家の武士の船を襲ひり事候て具小自状あふ
 國司中呂で自聽ふ出まふ初瀬とて賊を北婦を給ふ字賊を奉
 小駭きて面影の國司あつて天道の照覧をまむかへ婦人徴しむる
 一念今日小達を事とえりまふ公の罪人を小私めくひはをさし
 せし島本にまらして後小初瀬をたひは其首を小治郎に並信は備へ千
 辛万苦して報雪のなるしやう小居りてせり人よまらてくちて交りし
 こそ誠小千歳の恨を小散一万箇の村をむけりらる半見世の人の
 ありし其費を形國司のわきまへむひ小初瀬恩惠のあつて謝於此上
 いらる師も初瀬利度て亡夫の菩提を祈り度しやまき候國司あ

第六の巻の六

志の切なる感させぬに其の方津屋の臨月宮津屋の宮任にま
 わせし後心まにふすに其の方より七やふ給ふるにまをさしし
 待たし其頃國司別殿と學し多し画工と求め給ふ近頃肥後より奉
 菅北主馬といふと遠るものりめし幅をわら給ふ馬法正と氣韻又凡そ
 愛せぬお其出身のつら給ふ肥後府と奉ふれし言葉のほりの
 鄙めさふあやふ給ひ其本曾師家の徳来と奉語れは主馬許を
 あいふ元と豊後府唐やて國司社都ふまの多國海へて
 海城の雄少のい妻多者をもむりし知れ水使の術と来りて
 かき余を保て高船もあはけし國小飯ふ継母の母り都盤基事と
 失い空落り多りあは罪と數て一族にも見限れよれお類ふ
 なる京都の國司館打續き早せぬまは他家り家と継たよまはれ
 下向よりて系さふめはししあき肥後小寺の七縁作ては事なれ

惜が必命をた一度活名とすきと父多の墳墓とを掃して
 其後出家して先達の者れ善提と吊以て人あをた以侍り御業
 都に在りしにやれ深めりて今日畑の寺かお侍給ふに御
 鳴呼ぬ中々もせり事し侍は涙をぬる下國司はい給ふ
 姓名と書きたり稟しぬらき暗事あり知れ裂帛の琵琶を
 出さし近多受ある宮主馬許ててもなれ侍らやれ往年秘藏
 多り裂帛とにぬ事やとえ侍らし小國司の暗宗の寺や
 せしむしは妻子とてなせふあめを記をれ終はは後とてや
 主馬許休て大馬の旁に侍らん國司又偽て云幸我の娘あり出身
 してかの者おれは汝の我をてめおせん人主馬の尊余れ
 事し侍りて理可は此事鄙心安らさるやあり亡妻罪多と賊心某
 生を偷て今おてし承の置承守まはししに追薦とにまはし幽魂を

あての百利六

七

めり落情を恨む心と耻をなほあかす。再醮^{ニサイ}念を執侍^シは願之高
 明鄙情を察し給へ嘗情のゆふ國司も。嗟嘆給へ婚儀心は
 未し今日より館小存。安穩なれど宣ふ山王馬恩を謝し退かば
 北の方所居の中もなき。若君も上下其賀をばさふ國司酒を贈る
 終日喜酒を酌し夜も入し興園あり。國司主馬近き此北智達と汝
 再婚縁をばむ。此もく鬼魅と女を驚き事なれ。我は五魂の術あり
 今又まじりて初瀬と召給ふ北の方せり。初瀬は明日そ汝刺度
 を由給へられ。今宵なき女に代名類を侍女も名せし衣服あはれ
 ませう。けさまはむりたれ。さかだふもなき。上は盛飾濃粧の風流と
 御しぬれ。誠は天津とぬ。月宮をあらり。さかだ侍女もあつて國司の衆
 中もなき。主馬いさか上賜せん。面をあげて女は火妻の初瀬と汝寄
 ぬれ。まじりて小妾現し涙をばし。詞をもなき。もろわぬ。九段り

初瀬が貞操を晴宗が心で愛せしめて誠あはれ。汝給ふは二れは感極で
 國司の仁恵をまじりぬ。國司不男とせり。初瀬もははは今夕未だ終りぬ。今
 は夕は未だ縁をむむ。初瀬の名も。流川段めてわれ給へ。汝は夕の月
 並に晴宗も。一晴宗又本姓命を復して幸す。國司の國もあはれ。秋小
 仕下。彼裂帛の琵琶と返る。六をぬも狂て秋あつて。裂帛の名も
 哀然出れ。今より有明。名附し秘藏も。一秋は美意をばす。女婚儀
 と助む。侍女も余と給ふ。白銀厚枚のふ。袖十重をさけ。是り夫婦の者
 天々持地。謝して其恩恵の両山を。とばし。心をも長く國司みは。て恩顧
 まし。他もさか。國司の一族も。たし。ま。徒無の。さ。の。さ。さ。昔の女
 親身し。を誠。お。初。難。合。さ。其。さ。さ。其。家。氏。さ。れ。胡。誠。も。屋。を
 見。し。り。裂。帛。の。後。は。有。明。と。名。附。し。て。琵琶。も。ま。さ。の。也。ゆ。り。か。き

本下の方の六

このこといふ名

此ころの名は斐^{フイ}といふ名又えたり甲斐國といふころの思^シ太^タといふ
 その代古記録えたり甲斐^{カハ}又思^シ太^タといふ音の甲斐^{カハ}の轉語を
 一字りて斐^{フイ}と訓事いふありむ甲斐國と果^{クワ}もきふりて
 利^リ子^シと近江^{チカガハ}ありは栗^{クリ}子^シ又いふ梨^リ子^シ蚊^モの吸^スよといひ駿河^{スナガハ}
 さでいふ紙^シを袋^{フクロ}して板^{イタ}をツツ包^{ツツ}ぬむ紙^シの袋^{フクロ}なるふを
 て利^リ子^シといふやうさうさう毛邊^{モヘ}紙^シの縦^{タテ}横^{ヨコ}を列^{ツラ}紙^シを
 あいれづいふれりといふ栗^{クリ}と打栗^{ウチクリ}といふ式^{シキ}いふ扁栗^{ヒラクリ}の
 もみなり柳^{ヤナギ}蒲^{ハス}菊^{キク}をいふにふれりこの実^ミの名^ナいふや倭^{ヤマト}訓^{クニ}栗^{クリ}
 小^コこのみ神代紀^{カムヤマトノコトワカ}小^コ栗^{クリ}とみ古事記^{コトワカ}小^コ木^キ実^ミとみ應^{オウ}劬^ト云^{クニ}本^ホ實^ミ
 曰^{イハレ}栗^{クリ}俗^{ソコ}よきとわかやのみといふかとのと草^{クサ}の實^ミ○金^{キネ}葉^{エフ}集^{シュ}
 漢^{カン}字^ジ也^ヤ劬^トは板^{イタ}たはしむといふにふれり

菓子因果此身れいをかきよめ之此身と佛足在^ニ此^ノ身^ニの
 と見えり姓^{セイ}許^コ斐^ヒといふ音^{オン}之^ノ宗^{ソウ}像^{ゾウ}は攝^{セツ}社^{シャ}小^コ許^コ斐^ヒ社^{シャ}の聖^{セイ}
 此^レ許^コ斐^ヒ氏^シ同^{ドウ}きく許^コ斐^ヒ村^{ムラ}あり宗^{ソウ}像^{ゾウ}三^{サン}社^{シャ}小^コ織^{オリ}幡^{ハン}許^コ斐^ヒ令^{レイ}加^カて
 五^ゴ社^{シャ}ともいふとあり甲斐^{カハ}許^コ斐^ヒ巨^{キョ}斐^ヒといふは

けむけむか

祁^ケ牟^ム偈^ケも金剛^{キョウカウ}もさ沓^{クサ}之水^{ノミヅ}鼻^{ハナ}切^キ尻^{シラ}浅^{アサ}沓^{クサ}深^{フカ}沓^{クサ}
 水^{ミヅ}沓^{クサ}も鳥^{トリ}者^{モノ}高^{タカ}鼻^{ハナ}履^{ズミ}を又^{マタ}品^{ヒナ}高^{タカ}きも賤^{セチ}きとあか
 踐^{ツミ}物^{モノ}いふ祁^ケ牟^ム偈^ケと躡^{ツミ}沓^{クサ}や東^{トウ}海^{カイ}道^{ダウ}邊^{ヘン}りて人^{ヒト}は躡^{ツミ}らり
 人^{ヒト}を就^{ツク}り馬^{ウマ}と躡^{ツミ}らり北^{キタ}國^{クニ}して人^{ヒト}を躡^{ツミ}る人^{ヒト}
 あり馬^{ウマ}と躡^{ツミ}らり義^ギ我^ガりや金剛^{キョウカウ}も職^{シヨク}人^{ジン}歌^カ合^{カヒ}板^{イタ}金剛^{キョウカウ}
 毛^モほるんがうさうといふ金剛^{キョウカウ}とんこりけんといふ

あての万^{マン}あり六^{ロク}

九

まげの終りの是クミツツ小寺ミと首きクツと約テ多ク
申さる言便悪しければケル所トケル所ト云々
立りまほ倭訓栞けの事には平家抄は馬ハハクク
芥下と云々ト又云々ト云々ト云々ト盛衰記と云ハ
け見たり今ト云ハ草履云々ト云々ト

○高志のむらり

文政五年の夏五月八日久保田の長野坊小野寺の館に存
つるふるの日記紙後國蒲原郡出雲崎の橋守理由之訪来
此翁海月乃名ぬれし舟つらひの小舟と編り翁師と大江の栞行
藏光校之此し赤は佐のぬきと出く大谷の隠居せと云
此栞行藏紙後末と云々ト云々ト此こそぎの説みと云々
萱と人ト又考り右年折にけり萱と東とす今年賣と云人

の詞「舊萱」呂セハ賣りあるは是やと云々
去年は秋ふこも此新芽さ出て枝も花をいさ
此由之翁國上山の手鞠上人良寛の舎弟と云し國上の良寛の
旋頭歌ふ山々をれむひの岡ふ小杜鹿ひてを時雨あ欠ふ
ぬれつありま由之云紙後國対和郡某郷の莊屋と云
宗右衛門と云舊家あり此家在門と平宗盛卿後胤と云々大
江戸小石川春日町にき坂豊後守殿のありに小東大藏と云家あり
そと小東判官の末流と云人此流と云

○那崎のむらり

里の甜瑣語云水上の目名河流云大野村多漫多為本河目見河
と云々一里海湖水のうをれり赤沼と云流之今ハ
那崎村の通圖寺の梵刹あり浮島と云佳景の地也

あての百六

中より此赤沼より水はにいと多く値きまはくはせり存
古今著聞集ふみちけ田村の郡は後人馬九のりしやあり鷹つ
ひけり鳥と得てしむくゆけにあらぬまといはる鷹をの匠
なりけりとぞれととも射をけれやゆきむをよりはありけり
をいへり北谷の春沼もむくふとぞ今も雪消の頃とありて

○関眼子そのかざり

かゝり人見日記云 鑑照君義隆の沙代門川玄智関氏子
中より元と近衛家の清茶道とておしり浪介の北谷市市中石
かた居りしに六丁月海室小ぶれもの頭近者の町家とて藏師の
其壁と塗しとの等敷とて湯小入り居あり其れへ玄智も入
けれなることもし若中坊を邪魔とて事とてなふりよのしりけれ
酔興して行事なれば堪忍早く湯より揚て衣袋と着帯けり

らのせれも根興由家一跡り上り丸裸の初や玄智と捕へてみ
けり玄智一人を去あり扱つけれをのら太ふを扱はるる智
も覚悟の良相寄付ありて人より再如扱ひしにバツとぞいこの
林で逃去りし其席小鈴木宗因なるもの居合せ今の手練たる者
をいふに已もかゝりたるこれ通まのま式禮五小石家合ひれり
知らず其の道とて安事術の源源とてりも根重郎兵衛奈良山
長瀬南
新南根田四郎
也其末公也も玄智の弟子なりしを藩人其川入りの影く頭と
二百石少く依呂抱世禄今に形れ此玄智と庭苑假山水法少藝を
得たる者この園園と繁く法江氏少く矢橋全良寺の庭に造りむ
是と三嶋の園少く向の大藪を鳥海山とて中より引け富きと景
色今庭造りの商人三之助なり其比り是を家業とてありふ
ありき家とて其三島の景と園とをいへり此寺の跡は家談

若ての下り六

エ

坐り他國少中不名因少歌枕の聊を末の所を以て知り
 玄圖少院の跡も有とや此庭幽深の躰を以ては久風雅陰
 山一夜傾盆雨奪得廬山瀑布未の向々の瀑布藤名高
 少玄智聊の事君の流氣色を蒙り此國と亡余しり
 少の在り退んと思ひ折る止心流空術の奥意とて即其
 残る印加を傳へ凡六十何州の無雙の名譽なりといはれ
 けり其傳永く根田家残り今も其奥旨と門人の傳り時
 直指と一軸を以て掛せし事少なることとて宗因
 印加を免されんと怨望せし事少なり即其衛少改其言と
 少間根田も傳りし事少なり一封印に出る宗因は得て持
 根田を以て根田とせし事少なり宗因は此情を以て其奥旨

かのいひありし中其時既に北國で退り後評云玄智此を
 立退きと云ふは仙臺に徘徊せし人少修験乱心と云ふ
 きりけり捕りて殺されし彼甘雙は方少なりと云ふ事少
 左柞棒にて玄智を微塵に多れし事少なり此時修験も即死
 せり彼は蘊生しけり玄智は後少死せり母少此事少肥存討前
 知りてたれり事少なり真澄云鈴木宗因は兵衛を好又
 手跡を以て事少なり享保頃遠哉集を以て詩集を編み國籍
 の足場を以て事少なり宗因屋敷に在り山本郡檜山菅名家の浪士
 多し宗因の兵衛の弟子と云ふ小山素朴と云ふ宗因の筆道の師
 寺裡の田村社の額を此檜山の小山素朴書し今檜山小山文五郎
 宅あり此家と云ふ素朴の孫なりは宗因の墓と寺内に在り
 石を以てて兄弟の事少なり

事少の事少六

志まじりけが

出羽國雄勝郡まじり仙北郡を飲食川の流る未け夏秋
全つまじりて多きせける此毛本風より秋後國も三嶋郡
鳴中條を信濃川の流れる郷くみ有りそれを鳴中し志の
下色黒白赤黄斑ありあり此毛本風其事其集い
記され此毛本風はしり話あり

黒鳥社

越後國黒鳥村の神社の事なれども中ころふ志れり此
み下と前記ありけり外面と稲田と争わむが
身の内小源將軍義家朝臣の木像より其本像の腹巻五
本骨に日丸の紋ありと佐竹家より寄附ありけり
後人の物語ありめ塚は蒲原郡山王村灰方村の邊なり

酒吞童子が誕生一地と砂子塚より今も童子屋敷
字ありまじり弥彦山の鬼女妙多羅天より出湯の弥三郎母
中埋心あり峯の且二丈三尺斗とれ世にれり

河もまじり

柱源神法と神変菩薩の傳記ありき神事式之此法
大峯小絶ふ事あり其秘式と備前國小嶋の吉祥院より
山形行藏院傳來行藏院俊峯より寛延年中秋田綴子
なげ船着院英泉小傳と同綴子の神宮寺十三世龍峯より大
峯の前鬼の家小寛政八兩年柱源神法傳より文化
年山本郡扇田御南光院有觀大峯小めりひ登下行ひり
佛母孔雀明王經より前鬼の家小傳より

志まじりけが

天狗繪

山本郡盛岡の花藏院空吸中化の物語と河戸川の大塚寺の
尊英話云古法眼元信真の天狗神像画事と鞍馬寺に
七夜籠て祈りければ僧正坊あつたれとわが姿とま画した方
に六夜行者は像と画し右の方より義経像と画して下るはあ
三像を夜を履き是をとり此三像を加表表の姿画なり

名七つ名いせ

此哉後名寄二卷六蒲原郡寺泊丸山玄聖の編せりつり
板よきもいふをきり河内谷東光潤の無縫塔の事をいは
め新吉の各處もい記おたのこ橋由之のをれり之由之翁
八月十五日の夕作こ中屋敷りりまうと田の魚と申て八束穂の
身りやむるまけりや神代のもはるるあり

ナミミはあし

近世禁裡御造營の時ソきの國乃番匠と云き鉦引槍
鉦屑に思遣りまやう 此れ庭とえぬみに恐れぬは
と後とすまわの此跡をまけりまことふあてんを譽りりり

ナミミのま

下野國那須郡山口鉄五郎は領内より上那平の並松中に佐藤松
ソ二本よりその代の君とや佐井某と見給ひくこらま松とそ
あなれ此松を國もしてゐる中洲みまをいふは松はひた
とれよのねり柵と今の世けて佐藤松人のいふより

ちんま

寺内西津山のちんま平松山カクシマの美松似り近江國平松
神在り仁壽年中藤原頼平小神託りて山城國松尾と信せり
あての万和六

事東海道名所圖會三卷下法部

あそび

庭訓往來 明曆ノ註本上卷小田樂ト云事山法師ノ下部シモヘカ
 仕出シタリ比叡山坂本ヨリ始リ又秋田ナドへ行テ丸樂ノ
 二子ラシカ玉ヲ取りナドノ後ニハ神事祭禮ヲ勤メシ
 也云々又云今南部秋田等ニテ土番舞ハ是レ番樂
 トイハ神樂トイハルアリ仙臺ありしてハ多ク羽黒派ハ山伏の夜
 又南部ト云山伏モ村民モ舞ハ事ニヤコリヤハ事モ此三
 曲中ハ柳葉藤振ヲヤクハあそびガ名也是レ秋田ノ山車ト云
 番樂トイハルメドモ時詞ニカハ此土面ノ圖ト画トイハル詞ト
 云ク集めク田舎樂トイハル事ナリ

○七倉はくち

山本郡福田村と浅内村ハ枝郷ト天和三年のころ長桑橋村
 云々多之其ハ水源ノ方小いり大分土呂本ミヅノもとあり北涯
 ノ木雪押し枝れて其形鉄柄小似れ志ハ此あり
 鐵槌ノ長鉄振ト云其海方ハ珊瑚菜ト云ハ錠ノ形ハ
 人多重石防風ト云此村ありして鉄猫防風ト云鉄振防風
 ト云此ハ福田ノ古名ト鉄柄ノち曲リ云ハ始々長桑振ハ此
 也此邑小野呂田長堂門ト云上祖ハ淡利ノ家ト云麻生村ハ存
 テ八十解ノ家ト其世ト此邑ハ兵衛某也浅利ノ分限帳ハ見え
 今ハ此邑田氏田字某ハありて其世ノ形ト云此家して正月ノ式
 七倉ノ餅ト云折敷小蔵倉餅ト云ト云岩ノ形ト云ト云大東子作
 云々此中居テ其めテ小圓キ小餅ト云備ハ是レ七倉ノ餅ト云ト
 備ハ此中ト云々此ハ名ハ他在所ナリ

あそび

十六

正平の事

世正平地正平紋を鶏卵ニシ白粉ニシと會て漆ニシといや正平漆とい
之河古皮漆ニシといひ名之鎮宅靈符縁起肥後國八代郡白木山
神宮寺ニシニシス靈符尊像一妙見菩薩ニシ云八代神宮寺靈符板之
由來并正平御免事ニシ云云りみ吉朝ニシ靈符板ニシ彫ニシハ人自西元
聖武天皇御宇天平ニシ神年肥後國八代郡白木山神宮於是ラ
梓ニシニナリ公其時板ハ今滅ス今板ハ南朝正平年中に後醍醐
天皇第六御子征西將軍良懷親王八代郡高田郷ニ御住居時
梓ヲ御建立成サレ神宮寺ニ納メテ今出ル靈符ハ曼陀羅ニシナリ云
ハ代細ニシ所漆葎屋古来ヨリ傳ル板二枚アリ一枚ハ中ニ天平二年八月
ト有テ妙見像及八幡ニシ二字并梵字等アリ右神佛形アル故高買
ヲ思ニシ憚ニシテ征西將軍八代ニオハシニシス時南朝正平年中ニ別板ハ彫

ラセラル是ニシリ商買ノ免シラ得タルガ故ニ正平御免葎ニシ稱此
板ニハ正平六年六月ト有テ神佛形梵字ヲ除ク唐語ニシ花ニシ事ニシナリ
諸國正平漆權ニシ樂ニシリ云々南朝正平漆始ニシト軍器考ニシモ又ニシハリ

葎名代記八卷小上杉景勝築神指之城ニシ云々ト云慶長五年
庚子二月十日景勝命直江山城守兼續同十八日始ニシク神指之城の
本丸ニシを築ク是ハ諸士ニシハハの役ニシト云田賦ニシト不用五月十日籍於會
津仙道佐竹庄内米澤の役ニシト云又ニシハハ神指之城ニシ築ニシルハ
總奉行直江山城守小奉行小國但馬甘敷備後山田右衛門清水
權右衛門割奉行嶋倉孫左衛門村木奉行滿願寺右衛門等ニシ云
六月朔日神指之城大体ニシアリ其廣ニシ本丸東西百間南北百七間
壘根ニシハ高ニシ三丈五尺東西北小門ニシアリ四方石ニシアリ

正平の事

垣と廻の廣廿三間二の九東西二百六十間南二百九間墨根
九丈高北間之三月十八日斧始りし事も大三筋役より四月
十日を今日にあらはれしと云ふ二十日大徳と云ふ事と云ふ事

○お茶談

膳已茶談 桶山信田氏 實政の日記 云寛政十載年田崎宗向家小一ツの茶器
見事あり予その由来を聞にこふの其壺形如せて  五六升入ル下り其春の頃最上り山形権十郎と云ふ古物買所
宗向子貧乏けぬ古器も賣拂ひ家内すきんひの助をいふ
此壺のこゝろよくあふぬけぬ是もていふ事いふ事
思ひ家強し故に自苦に窮しと云ふ古器の目利も亦火の
代小毛知しむと権十郎小見せれば大小並き是も高代珍器
是より日本小三渡り壺に云ふ事いふ事いふ事いふ事

さうさう傳來と云はれ其形と見録りなほ正しく 茶器
遠いなりと云ふ買り放給代百五十金云々いふ宗向子肝を
消し多額奉寄身も茶道の家小なれどもありに見るべき
其壺の能くふりや商人の解し後伯父小野寺公ふその
や中にも権十郎の目録平きよ恐らくわきま見えぬ
しれ江府へつせよと云ふ宗向子ぬれ宗向子幸に公は禁
從て其買江府へ赴てぬ壺を目利者小見せれば各驚入り
斗之其中に喜三郎といふのは天下の名物を今ある
公家の清寶藏の清江蓮櫻の名品類ひふふいふ其
價いくなくと論がし日本小三あつて今二と公家家珍
一は切方知れぬと云ひ傳へ其一二を知らず人あり好む
ぬ北價壹萬五千兩と云ふべしと云ひし宗向子思ふ北名景

あてのりふ六

福城寺より臨濟宗之北城主舎第山岩城半治郎康常と云い
 其康常入念持佛として北寺に虚空菩薩をせり云い北虚空藏
 柗津の虚空蔵なるなり木にて柗津本木と云い木末は虚空大師
 作り給ふと云いありと云い尊をちひせありと云い新着聞
 集云出羽は柗津の虚空藏の池に鮮魚影あり蒲生野守殿是
 と見給ひと云いありと云い毒を流し殺せりと云いありと云い
 殺せ禁断の地なりと云いと云い是れは終に終りにたふさぶ
 悉くころあまひけり其日より十日間大地震告りて山崩れ川
 を河堰は流るる城中とはぬ民家もろく廢類も多し死
 けりやと云い下野守殿の家も亡びりてと云い其時薩摩本
 本末は高野大士の作り給ふ外にありと云い事ありと云い其時
 扉内は絞女花女を仕へり云い云々の女房は皆持て預けり此等

近隣と云い寺の瑞龍山雲性寺より雲性院殿貞祐大仰と
 戒札してと云い岩城半治郎康常の室より同濟家にて本真
 如意輪觀音菩薩之住僧に謙宗長老と美濃國多藝郡
 上有知村の産之より父母の國に隣はなれふふと云い戀人あり
 流るる中へ鶴丹を中長川の近江ふもなりありと云い此の女は
 皇の庶代業之と云いありのく山より石と取来ると云い山より
 今に其山を金花山と云い其麓ありの鏡工もがらけ銘を金花
 彫事北山と云い別れ稲葉の山と云い山共をあらけり此
 寺を出る古城山と云い謙宗法師のころと云いありけりと云い
 ありと云い登りて方分石ありと云いありと云いありと云いありと云い
 水火風空の層石と云いありと云いありと云いありと云いありと云い
 館神と云い神なり八幡御を齋きなりは社之北城山高なりと云い

あてのふゆ六

八方より水能及元液の事又こり四方より南小土崎の浦樋
 岡北小井戸海鳥館大張山東寺の海より天台福性寺の跡と
 又云をみの形と麓つとす出た小山ありて燈籠寺と
 せり下其より岩城右衛門大夫康信同半治郎康常世の榮之か
 せりき七月十三日の夕ぐらに燈籠を楢くみ掛照して峯を
 尾上も溪水の底までも照りて光を遠近と見え液の形より
 西小笠井戸ありて開山堂と云ふ跡をなす鳥屋場と云
 見ゆるとむり廣瀬友尊より薬師ありて真白府の鷹とありけ
 捕りて物置ありて廣瀬の後だありて下寺山の内南ありて産
 のすは草花の以河たら中をみり又云を燈籠とありて鶴池
 坐て各ありて下をみり産花ありて水いりて下をみり夕雲橋
 と云ふ家の名とありて池と云ふありて名定むる其神原のとき

小土崎の大池ありて田鶴の多ふ群小ありて雛と養ひてとあり
 其ありてとて居て懐守とせれあり東方に遠なる其ありて
 又云を子鶴の池と云ふも草刈をとりて高畑と云ふ
 神田八軒 岩瀬中村小入 是を大塊の堀と云ふ此ありて
 矢橋小流の物置と草刈とありて下をみり路り下る大土原
 中を池の横長嶺と云ふ内外神社の下つら小馬隠しと云ふ
 世小君馬と云ふ隠しありて鹿島社ありて小土原
 不遠く頭塚ありて村より横町四口門前弥藏小路と云ふ
 じりの城とめける名を預けけり甚兵衛小路と云ふ六陣場小
 路と云ふ岩城康信臣大張某の後大張作左門と云ふ村に
 まい安養寺治部之助の後小大張角右衛門と云ふ此家小土原
 小土原具足小土原大土原の山をとりて小土原の山

あての下の六

社司近谷宗光の家は御小鎧はう刺弁とて友次郎も
 二尺五寸と藏めまゝ龍寶山神王寺寶藏院法印玉容其子善隨
 坊玉豊を居形しして詰らひける家を訪ひて系承ひしを
 二重四六玉容云家の上祖と鈴木三郎重家八嶋の御小鎧を
 のせり三人の御一人は紙後後一八四國七派以重家舎才助
 能野別當丹宗に心替りけり重家も九郎義経分内を以て
 藤代引籠りて居りしは重家の五郎をける藤家八伊勢の
 國に在りて神王をまもりしは藤家なるは陸奥に來りて平原に
 父のち九郎とてまひりしは四郎も多しは御小鎧を以て白河邊を
 さまりしありし棚倉より系承りて民家に入りて彦六といは平原
 の御小鎧多しといは具はて常陸のいり太田は今宮家は
 藤家の名も尊盤あるもめがけしはけしは師承ひし

頭襟もかけふけしはけしといはりて此もまをしけるを二世寶藏
 院尊盤二世常樂院岐山嶺三世寶性院尊養四世寶藏院岐養五世
 寶性院尊者六世寶光院尊清七世寶藏院尊榮八世文治のいり
 今寶藏院玉容といはりて上祖鈴木三郎の家譜ありし神護景雲の
 末寶藏院元光仁天皇玉霞園獄して御劔とて名を地蔵大士像
 是を花園の地蔵とて世に承り其名のみつるもは御小鎧
 花を以て地蔵菩薩と今此家御一人も地蔵大士の像を副書二枚
 其詞小 紀州熊野本宮花園地蔵大權現之尊像並本地縁起
 卷物一本 右者譲汝者也 永後代可奉尊護者也 といふなり
 まゝ鈴木家譜一卷 幡志部八白〇〇 玉鈴小文字稻穂丸三郎
 の血花押ありき 重家 重家 助家 義家 頼家 常家 藤家 種家
 為家 宗家 貞家 高家 秀家 平家 持家 経家 重家 信家

あてのりふく六

廿二

住家歳家次家真家伊家村家藤家之北内重家十八代又
重家より貞家土代より貞家あり七代は藤家其代は藤家同島

ア、げいふとほがら

おのわたりふ龍毛症よりありあり（北處之普賢菩薩と詞し
地中龍牙の白象かきと名りや江家次第一巻永のふ
山城國徳岡大和國都介河内國更占近江國龍華丹波國禮
とありて龍花の字音ふびつと名てやありむりまゝ徳賢
録小天安元年云々唐寅始置近江國相坂大石龍花等三處之關
中免えり北龍毛村中村より龍毛澤井重助といふ推尊家あり
今世より北龍毛村大を家ありてちち買ぬ寛文のはじめ
國守義隆公入らせ給ひて龍毛をききまをばけり流ぬぬ
り作りぬるより大よ多下いり八ノ脚岡の川桂の棟木秋の柱

各世小跡しき材木より五十八代桓武天皇御世延暦廿四年の頃
手斧始りて大同元年丙戌の春山建が家之上祖と加賀國へりて
ありが家語をせてさくらに傳へ中興と澤井兵衛澤井記に亦
記の世より皇都の法師八幡宮御袖形でもなりと傳へて家あり
休らせ給へりて二月九日其事して空いて寒くまのたつて
田園曳きて雪の上をそとせり雪重くく群引ありき休ふ
坐き八下部若雄火とくまて白粥てくめ都人より雪の雪袖
の氷を中けて時より此まぬゆと都のくまはまありは雪
注ぎぬぬやけぬ雪恒の萱と折く其折着てて給へり
まのさむぬぬいり時つくと松のまふつてまの龍馬の登
りて淵に光ぬぬ淵あせ流ぬぬ池に庭ぬぬ村の名を
龍池のまひ言てまひ伝へ龍毛をくまらぬぬ其傳言

あてのあゆみ

